

急性期脳血管障害への治療は種々の分野で進歩が見られる。脳血管障害の機能障害の改善を主要な役割とするリハビリテーション医療でも、現時点における急性期脳血管障害の治療の現状を知ることは重要である。そのため、脳卒中治療の最近の話題を企画した。幸い、執筆をお願いした各先生方がそれぞれの分野についてわかりやすくおまとめ下さったので、脳血管障害の急性期治療に直接携わらない人にもよく理解できる内容となっている。

■ 脳神経血管内手術の利点は低侵襲性と簡便性

脳神経血管内手術は脳血管撮影を行いながら、頭蓋内血管にマイクロカテーテルを誘導して治療を展開するものである。ここでは出血性脳血管障害に対する治療、すなわち脳出血の原因血管を閉塞させる物質の注入について触れられている。脳動脈瘤、脳動静脈奇形、硬膜動静脈短絡の治療での役割、手術の利点と欠点、他の手術との関係を簡潔に述べている。(江面正幸氏ら、505 頁)

■ 脳神経血管内手術は虚血性脳血管疾患の魅力的治療手段

虚血性脳血管疾患への脳神経血管内手術には局所線溶療法や血管形成術などがある。局所線溶療法は閉塞部位へ選択的に血栓溶解剤の注入を行うものである。脳主幹動脈の脳塞栓症に多く用いられている。血管形成術はバルーンカテーテルにより血管の拡張を図るものであるが、最近はステント留置術の有効性が指摘されている。これらの治療技術の現時点での適応や問題点がわかりやすく述べられている。(坂井信幸氏、511 頁)

■ ガンマナイフは脳動静脈奇形で多用される

ガンマナイフは中枢神経内のきわめて限定した部位に、選択的にガンマ線を照射する治療方法である。非侵襲的であり、脳血管障害、脳腫瘍に効果を発揮する。脳血管障害では脳動静脈奇形への治療例が圧倒的に多い。著者はとくに脳動静脈奇形の経験症例を呈示し、病変の大きさ、照射線量などから見た問題点、今後のガンマナイフの発展の可能性などについて述べている。(天野恵市氏、517 頁)

■ 脳低温療法は脳血管障害の機能予後回復に有用

脳低温療法は脳組織温度を管理し、二次的に起こる脳への侵襲病態を押さえて、その間に障害された神経細胞に酸素供給や補充療法を行うものである。同時に発生する心肺機能や免疫防御系への対策を十分に検討すれば、この治療法の脳保護作用によって、生命予後とともに機能予後を改善する有力な治療方法となりうる。著者はこれまで重症頭部外傷への有効性が報告されてきた本法の脳血管障害への適応を概略している。(林 成之氏、529 頁)

■ アルガトロバンはアテローム血栓性・ラクナ梗塞のいずれにも効果あり

選択的抗トロンビン薬アルガトロバンは発症 48 時間以内の脳血栓症急性期への効能が認められている。著者らは治療成績の検討から、アルガトロバンがアテローム血栓性脳梗塞、ラクナ梗塞のいずれにも有効で、安全性も高いことを指摘している。脳梗塞急性期には、心原性脳塞栓症を否定し得た時点で、タイミングを外さないようにアルガトロバンを開始することを提案している。(内村公一氏ら、537 頁)